

周辺地区の住民の生活を

支えてきた要の街

四万十町
町内
ぶら～り
散策

く ぼ かわ
久保川



「久保川口」は国鉄バスの停留所名。

小野(先月号)の対岸。北方にそびえる笹平山から流れ来る久保川が四万十川に合流する最下流地点に展開する集落である。この地区全体を「久保川口」と呼ぶことがあるが、これは、国道沿いにあった国鉄バスの停留所名が「久保川口」だったことによる。地区名は久保川である。

細々(河内)村などと同じく、元は小野村を構成する一村で、戦国期の記録には「窪川村」とある。「久保川」という表記になったのは近代になってから。江戸期には、窪川村の庄屋が細々村と大道村を支配していた。

「昭和と十川、半々だったかなあ」

小野と同様、十和村誕生前は昭和村に属していたが「首都」である昭和より十川の方が近くて行きやすかった。十和トンネルがまだない時代、昭和へは穿入蛇行に沿って河内を大回りするか、峠越えで行くかしかない。ただ、対岸の小野と違ったのは、昭和とも地続きであったという点である。「十川との関係の方が深かった」という小野に対して「どっちとも言えん…半々だったかなあ」と久保川の翁が語る。

久保川は交通の要衝である。東西に走る国道から北へ向かう「大道地区」への道。南には大集落「小野地区」へと渡る小野大橋。このような位置にあるため、古くから人の往来があり、様々な商店が営まれてきた。旅館もあった。また、助産婦さんもいて、夜中に呼ばれることが度々あったらしい。久保川は、周辺住民にとって生活を支える重要な「街」だったのである。

峠を越えて昭和へ向かう「代表」をみんなで見送った。

さて、地区の産土神である日邑(火村)天神のすぐ前に高齢者福祉施設がある。施設は旧十和小学校の校舎を利用している。この小学校の前身は明治8年創立の久保川小学校で、昭和34年この場所に移転。その翌年、十和小学校に改称した。平成15年に休校となるまで、小野・久保川の多くの子どもたちがここで学び、遊んだ。前出の翁が言う。「昭和小学校で音楽祭がある時に、歌が一番上手な子が代表になった。峠を越えて昭和へ向かうその子を、クラスみんなで見送ったものです」何と微笑ましい光景だろうか。見送る子どもたちの激励の声が聞こえるようである。



日邑天神から見える、瀟洒な校舎を利用した施設

町のうごき

(1月31日)	人	口	前月比	出生	死亡	転入	転出
男	7,386	-13	男	3	18	10	8
女	7,987	-11	女	2	16	14	11
計	15,373	-24	計	5	34	24	19
世帯数	8,063	-4	(1月中の届出)				
窪川地域 10,950人		大正地域 2,110人		十和地域 2,313人			